

dialogs

Proceedings of the Department of English Communication
Number 17 February, 2017

**Commemorative Edition in Honor of the Retirement of
Professor Masami Kurata**

Contents

Articles

- Educational and Social Benefits of English Bible Study for
Adult EFL Learners Rosa Suen (15)
- Reflections on a Metaphorical Complexity Lens Approach to Researching in the
Second Language Classroom
..... Joanne May Sato (35)
- Intersemiotic Issues of Translation Theory: Transformations of Participation
Frameworks in the Toastmasters Club Activities
..... Miyuki Takenoya (55)
- Language Death~ Case of Newari Language
..... Birendra Bhaila (81)
- How to Cope with Exceptions Masamitsu Suzuki (91)
- Extragalactic Astronomical Masers II
—Submillimeter maser and maser in narrow-line Seyfert 1 galaxies
..... Yoshiaki Hagiwara (105)
- Essays**
Like the grass, like the flowers of the field: Personal reminiscences (2)
..... Masamitsu Suzuki (115)
- Reports on Academic and Educational Activities in the Year of 2016** (167)

dialogs

第一七号

東洋大学文学部

英語コミュニケーション学科

平成二十九年二月

dialogs

倉田 雅美 教授 退任記念号



東洋大学文学部紀要 第70集
英語コミュニケーション学科篇
第 17 号



東洋大学

〈表紙〉

The Royal Eavesdropper

“Hearing of a meeting between Tristan and Iseult, King Mark hides in a tree above them.

The lovers see his reflection in the pool and gossip casually together.

This, for a time, convinces the king of their innocence.”

dialogs

第 17 号

倉田 雅美 教授 退任記念号

太陽の慈悲

櫛風沐雨の十七年

「人間の研究」

倉田雅美教授の略歴と主な研究業績

高橋 雄範

鈴木 雅光

倉田 雅美

東洋大学文学部紀要 第 70 集

英語コミュニケーション学科篇

目 次

倉田雅美教授退任記念	1
------------	---

論文

Educational and Social Benefits of English Bible Study for Adult EFL Learners Rosa Suen	15
Reflections on a Metaphorical Complexity Lens Approach to Researching in the Second Language Classroom Joanne May Sato	35
Intersemiotic Issues of Translation Theory: Transformations of Participation Frameworks in the Toastmasters Club Activities Miyuki Takenoya	55
Language Death ～ Case of Newari Language Birendra Bhaila	81
例外の処理 鈴木雅光	91
Extragalactic Astronomical Masers II —Submillimeter maser and maser in narrow-line Seyfert 1 galaxies Yoshiaki Hagiwara	105

随想

草のよう、野の花のよう — 回想の詩（二） 鈴木雅光	115
----------------------------	-----

平成28年度英語コミュニケーション学科活動報告	167
平成28年度英語コミュニケーション学会報告	171
平成28年度英語コミュニケーション学科専任教員活動報告	179

太陽の慈悲

高橋 雄 範

倉田雅美先生は、2017年度をもって本学をご退任されます。ご定年とはいえ、何か言葉にできない、「太陽」を失うかのような寂しさが胸に押し寄せてまいります。

先生ご退任の前年度となる2016年度、学科改組に伴い、本紀要 *dialogos* も終刊を迎えることとなりました。私たちは、学科の総意として、是非とも本号を、先生をお送りする特別号としたいと考えました。そして、その心からの思いを先生にお伝えし、ご了承をいただくことが出来ました。

倉田雅美先生が、D・H・ロレンス研究の分野で数多くのご著書・論文・翻訳・書評等を発表してこられ、学内外から尊敬を集める大文学者であられることは、周知の通りです。

と同時に、先生は、学生からも教職員からも、心底慕われ敬われる存在でもあられます。不思議な、あまりにも不思議な磁力を、先生はお持ちです。その磁力はどこから発せられるのでしょうか。「慈力」とでも表現すべきご人格の力—慈悲の力—であると、私には思われてなりません。私の尊敬する教育者の言葉に、次のようにあります。

「教育は、最優最良の人材にあらざれば成功することのできぬ人生最高至難の技術であり芸術である。……されば、母の愛と父の慈とを代表することのできるものにして初めて成功するところであらう。」

「教師は自身が尊敬の的たる王座を降って、王座に向かうものを指導する公僕となり、手本に導く伴侶となる。」

私にとって、倉田先生は、教育者としてのあり方を示してくださるロールモデルです。

倉田先生を思うとき、私の魂には、ある哲学者が若者に送った次のメッセージが響いてまいります。

「どこへ行こうが、あなたがいるその場で、太陽と輝いてください。
その太陽といっても、わが身を焦がして、まわりに暖かな希望を与え
るという、そういう意味での太陽であります。」

倉田先生は、太陽のような慈悲の心を体現しておられます。先生は、私の目指す人間像そのものです。

倉田雅美先生、長年に渡って多大なご貢献・ご献身を賜り、誠に誠にありがとうございました。どうぞご健勝で、これからも私たちをお導きくださいますよう心よりお願い申し上げます。

櫛風沐雨の十七年

鈴木雅光

私の記憶に強く残る先生がいる。平成12年4月、倉田先生は工学部から、私は短大から英語コミュニケーション学科に移った。以来、十七年間、共に英コミの歯車を回し続けた同腹である。英コミ開設当時、同じ夢を見て、学科の将来や理想を語りあった。時折異なる夢を見ることもあったが、総じて同じ夢を見て過ぎて来たのではないか。

開設2年目に、先生は学科主任に就任した。当時、寄せ集めの英コミは、会議の体をなしていたと言い難く、学科主任気取りの長老が数名いた。会議が6時を過ぎると、早く終わらせるようにせかし、途中で出て行く者もいた。新しい学科を作っているのであるから、我慢し汗をかくべきなのにこうであった。あるいは寝たふりをしたり、茶々を入れたり、会議で決

まったことをひっくり返すようなこともあった。まるで主任が数名いるような時代だったため、初期の頃の学科主任はやりにくかっただろうと思うが、倉田先生は淡々と彼らの機嫌も取ることなく、業務をこなしていった。

学科への情熱をもっとも抱いていた先生でもある。そのエピソードを一つ記す。学部長宛に調査委員会を設置するように要求する「一父兄より」という意味不明の怪文書が送りつけられた。この方は学科の歯車を、逆に回している方であった。学科会議は気まずい雰囲気になっていた。学科主任の倉田先生は学科会議で、「英コミをつぶそうとする教員がいる」と言っていて、突然落涙した。学科会議で涙を落とす教授を見るのは初めてだった。私ばかりか周りの先生方も驚いた。怪文書を送りつけた方はその後学科を去った。倉田先生の涙は、英コミの旗の下に結集した我々の理想に挑戦する者に対する決別の涙だったように思う。それほどこの学科に熱い想いを抱いていた。

倉田先生が大学院の開設に尽力したこともあげなければならない。大学院の開設は、開設2年目に本学科に招聘した山中先生の奮闘によるところが大きいの。山中先生は開設の趣意書が突き返されたとき、「もう書くことがない」とこぼしたこともあったが、そこから実力を見せつけ、大学院の開設に漕ぎ着け、定年まで専攻主任を務めた。その山中先生を陰に陽に補佐し、カリキュラムや課程表の采配に力を発揮して、大学院の基礎を確固たるものにしたのが倉田先生であった。

倉田先生の専攻はD・H・ロレンスである。英コミには、シェイクスピアの名前は知らなくても、ロレンスの名前を知らない学生はいない。英コミに入学して来る学生は文学にはほとんど関心はないが、倉田先生により文学に覚醒したという学生が少なからずいる。私が大学院時代に習った先生に、ロレンスの専門家がいた。そのお陰で、私は少しこの作家を知っていたし、何冊かは原著を読んでいた。

いつだったか頂いた倉田先生の著書『ロレンス―人と文学』に、次のよ

うに述べられている。「本書を著すにあたり、可能な限り批評家としてではなく、つまり一般読者に批評家としての見解を押し付けたり、専門的知識を与えるのではなく、人間ロレンスに対する一現代人としての視線を第一に考慮した。」自分の見解を押し付けない謙虚な姿勢は、倉田先生の日常生活そのものである。

平成20年度に、海外研究を取られ、ロレンスの生誕地ノッティンガムに一年間出かけた。その成果を我々は大いに期待していた。予想通り、イギリスでの研究成果は『ロレンス愛と苦悩の手紙—ケンブリッジ版D・H・ロレンス書簡集』の訳編となって現れた。しかし、異国での一年間の生活は、先生の体調を崩すことにもなっていたようだ。帰国後しばらく、何種類もの薬を飲み続ける先生の姿を、驚きながら眺めていたものだった。

が、体調が芳しくないにもかかわらず、前任者が定年で退職したとき、大学院の専攻主任を引き受けてくれた。このように責任感の強い先生であった。留学生の数が多い我が専攻では、留学生の動向に常に優しい気配りを示した。

専攻主任という激務の合間に、倉田先生は「勉強をしないといけない」と何度も口にしていました。ロレンス研究の仕上げを意図していたのかもしれない。私もそうだが、還暦を過ぎるようになると、残余の研究生活が見えて来る。若いときとは違った意味で、研究を急がなければならないのだ。ようやく激務から解放された先生は、ロレンスの国際会議に出かけたり、運動部の部長を引き受けたり、ゼミ合宿に出かけたりと、比較的落ち着いた研究生活を送っていたように思う。しかし、主任時代の心労が重なったためか、体内にカメラを入れることが度々あり、我々を心配させた。

当時、オーストリアのチロル地方に魅せられ、毎夏出かけていた私は「ロレンスはオーストリアやスイスへ旅行していますか？」と訊ねた。すると翌週、先生はロレンスがオーストリアについて数頁書いている紀行文的小説を持って来てくれた。そこに書かれている風景描写を読んでみた。私

が知っているチロル地方そのものだった。それが縁で、ロレンスが、オーストリアとスイスのどの地方を回ったのか少し調べた。後日、私がスイスとイギリスのロマン派詩人たちの関係を、調べる切っ掛けになった本でもあった。

平成23年の夏、私は道楽で、バイロンがスイスに滞在したときの書簡集を半分ほど訳した。それを讀んだ先生は「本邦初訳ではないか。本にするときは前書きを書かせてほしい」と言った。私は少しよい気分になり、後半の訳を急いだ。門外漢の私には、先生の推薦文まで頂いて、それを出版するほど価値あるものなのか計りかね、途絶したままである。

ロレンスと言えば、性的描写で発禁処分を受けた作家である。愛とか性は、我々の日常でも時々話題になる問題である。「こういうケースではロレンスは何と言っていますか？」と質問したことがあった。はにかみながら、「ロレンスの愛は…」と説明する先生は、まさに恋する先生であった。

また、人間味のある先生であり、学生に対する思いは人一倍強く、加えて、イギリス的風味を漂わせる先生は、学科で断トツの人気があった。先生を慕う「恋する学生たち」で、ゼミ志望者は定員をはるかに超え、選択科目は椅子がなくなるほど埋めつくされた。愛の妙味を切々と説く文学講義は、学生を宙に舞わせうっとりさせた。講義終了の鐘が鳴っても、学生たちはまるで魔法にでもかかったごとく、机を離れなかったと聞く。この講義には、他学科の学生も聴講しに来ていたようだ。まさに教師冥利に尽きる仕事を成し得た先生でもあった。大学院の講義では、他大学から聴講生を集められる唯一の教授が倉田先生であった。

私は、日常生活でもたくさんお付き合いをさせて頂いたが、倉田先生は食通でもあり、ワインには一家言を持ち、食事をオーダーするとき妥協しなかった。ほどよい英国趣味に彩られた先生は、優雅さも品格も備えた紳士であり、私が何か困ったことがあったときは、真っ先に倉田先生に相談し、温厚で適切な助言と知恵を頂いた。先生は議論が紛糾するときは、い

つも押さえ役を演じる紳士でもあった。

私より年長であるが、先生とは同級生のように付き合って頂いた。本来は、駆け落ちしロレンスのそばに一生つきそったフリーダ夫人のような役目を私がすればよかったのかなとも思うが、遠慮のいらぬ付き合い方をした点で、十七年前、この学科に移って来て本当によかったと思っている。フリーダ夫人はロレンスを“*He was so brave; such a fighter; such a Man.*”と形容したが、この言葉は倉田先生にも似合う。我が学科での、先生の馳駆の労をいとわない羽ばたきは、正にこのセンテンスそのものだった。

先生は今後どうなさるのだろうか。イギリスには退職後、田舎に引きこもり、悠々閑々とした日を送るカントリー・ジェントルマンがいるそうだが、先生にもそのようなお姿が似合いそうに思える。

「人間の研究」

倉田雅美

「人間がやるべき研究は人間の研究である」と言ったのはアレキサンダー・ポープであるが、今までの人生を振り返ると、私の生き方の原点はこの言葉に集約されているように思える。

都内で町工場を営む父親の会社には様々な人間が出入りしていた。お得意先や仕事をもらいに来る人、金策に走る人などいろいろだった。勉強嫌いで平々凡々と日々を過ごしていたが、そうした大人たちを見ながら、「この人はいい感じ」とか「よくない感じ」とかと本能的に判断していた。人間に対するこうした判断基準はその後、また今でも続いている。それを独善とか偏見とかと言う友人もいたし、また私自身感情的であり稚拙だと分かっていたが、そんな折に出会ったのがD・H・ロレンスであった。このイギリス人はポープをさらに深化、拡大したような作家で、人間を批判また賛美の対象とすることで「人間の研究」に徹した。そのような勇氣は私には毛頭ないが、ロレンスから学んだことは、こうした明確な批判眼を持つことの大切さだった。その批判眼の根底には「自然の一部として生きるか否か」という人間にとっての根本的な命題がある。「よき動物であれ、己の動物本能に忠実であれ」という森番のモットーは（『白孔雀』）、若き日の私の心に沈澱したロレンス思想のカスであったのだろうか。

イギリス文学から学んだことは数多くある。イギリス人作家の精神やイギリス社会、歴史は勿論であるが、世界で最も発展した（と言われる）国家形成を果たしたイギリス人そのものの理想と現実、実像である。これはイギリス人やイギリス社会への賛美に直繋がるものではないが、人間の将来像が見えてくる貴重な資料であり経験であった。経済や政治、科学、また

経営学とは無縁、もしくは敢えて目をそらし続けてきたが、「イギリス文学を通した人間の研究」は避けることのできない課題であり続ける。イギリス（人）の獐猛さや繊細さ、野心的であり保守的な感情、無責任、優しさ、またユーモアに隠された陰険さなどは私にはない特性であり、文学作品や実生活でこうした場面に出会うたびに驚きだった。すべてポープの言う「人間の研究」に繋がる。

「虎よ、虎よ、燃えるように輝いている
夜の森の中で、
どのような神の手が、また目が
お前の恐ろしい均整のとれた体を創ったのか」（「虎」）

このブレイクの詩を人間の持つ美への賛歌と理解出来たのも人間研究の成果と言えるだろう。英詩はイギリス人研究の宝庫であり、自然に対する彼らの繊細で敏感な感性に満ちている。R・ヘリックやJ・ミルトン、R・ブラウニング、R・ブリッジズ、ロマン派詩人、T・キャンベルなどは紅茶を吸りながら鑑賞するというよりもイギリス人研究の恰好の場と考えると、目が離せない。英詩をはじめとしたイギリス文学に触れることは単なる知識の吸収ではなく、人間研究の一過程であり、まさに実学である。

若き日に会ったポープの言葉に啓発され続けてきたが、これからも文学に隠された「人間研究」の謎解きが続きそうだ。

本号が最後の学科紀要となります。記念号の提唱をして下さった学科長の高橋雄範先生やその後押しをして頂いた鈴木雅光先生、編集担当の竹野谷みゆき先生に感謝致します。また、本学での32年に亘る教員生活を支えて下さった教職員の皆さまに心より御礼申し上げます。

倉田雅美教授の略歴と主な研究業績

学 歴

昭和45年	立教大学文学部英米文学科卒業
昭和45年	立教大学大学院文学研究科入学
昭和47年	立教大学大学院文学研究科修了
昭和51年	ノッティンガム大学大学院英文学専攻入学
昭和53年	ノッティンガム大学大学院英文学専攻修了

職 歴

昭和55年	千葉商科大学短期大学部（千葉短期大学）専任講師（～昭和57年3月）
昭和57年	千葉商科大学短期大学部（千葉短期大学）助教授（～昭和61年3月）
昭和61年	東洋大学工学部助教授（～平成3年3月）
平成3年	東洋大学工学部教授（～平成12年3月）
平成12年	東洋大学文学部教授（～現在）

[非常勤講師]

昭和48年	東海大学文学部非常勤講師（～昭和51年3月）
昭和53年	専修大学法学部非常勤講師（～平成11年3月）
平成2年	青山学院大学文学部非常勤講師（～平成4年3月）
平成13年	早稲田大学商学部非常勤講師（～平成17年3月）

学外における活動等

昭和55年	立教大学D・H・ロレンス研究会幹事（～現在）
平成元年	日本ロレンス協会評議員（～現在）

研 究 業 績

〔著書、翻訳、編訳書〕

- 昭和60年 『壮大への渴望』(共訳)(岸英朗、法政大学出版局)
- 平成元年 『話題源英語(下)』(共著)(井上擁雄編、東京法令出版)
- 平成3年 『身体イメージイギリス文学からの試みー』(共著)(江河徹編、ミネルヴァ書房)
- 平成14年 『D・H・ロレンス事典』(共編訳)(木村公一、宮瀬頼子、鷹書房弓プレス)
- 平成17年 『D・H・ロレンス短篇全集第4巻』(共訳)(戸田仁編、大阪教育図書)
- 平成19年 『ロレンス一人と文学、世界の作家』(単著)(勉誠出版)
- 平成23年 『ロレンスー愛と苦悩の手紙』(共編訳)(木村公一、伊藤芳子、鷹書房弓プレス)
- 平成28年 『一人の詩人と二人の画家』(共訳)(木村公一、伊藤芳子、春風社)

〔研究論文〕

- 昭和43年 「暴露ーD・H・ロレンス、“Odour of Chrysanthemums”と“The Widowing of Mrs.Holroyd”」(『英米文学研究室』第5号、立教大学英米文学研究室)
- 昭和47年 「D・H・ロレンス;「馬で去った女」について」(「プロスペロ」No.6、プロスペロ同人会)
- 昭和48年 「D・H・ロレンス;ニューメキシコ」(「プロスペロ」No.7、プロスペロ同人会)
- 昭和49年 「D・H・ロレンス;“The Fox”について」(「プロスペロ」No.8、プロスペロ同人会)

- 昭和51年 「D・H・ロレンス；“The Ladybird”について」（「プロスペロ」No.9、プロスペロ同人会）
- 昭和52年 “The Themes and Characters in the “The Fox””（「プロスペロ」No.10、プロスペロ同人会）
- 昭和55年 “A Study of “The Captain’s Doll””（「千葉短大紀要」第6号、千葉短期大学研究室）
- 昭和55年 ““Snake” by D.H.Lawrence”（「始祖鳥」創刊号、立教大学D・H・ロレンス研究会）
- 昭和56年 “On “The Ladybird” by D.H.Lawrence”（「千葉短大紀要」第7号、千葉短期大学研究室）
- 昭和57年 “On “The Fox” by D.H.Lawrence”（「千葉短大紀要」第8号、千葉短期大学研究室）
- 昭和58年 「ニューメキシコのD・H・ロレンス—“The Overtone”」（「千葉短大紀要」第9号、千葉短期大学研究室）
- 昭和60年 「“England, My England”についての一試論」（「千葉短大紀要」第11号、千葉短期大学研究室）
- 昭和62年 「*Twilight in Italy*について」（「東洋大学工学部教養課程研究報告」第22号、東洋大学工学部教養課程）
- 昭和63年 「“The Horse Dealer’s Daughter”について」（東洋大学工学部教養課程研究報告）第23号、東洋大学工学部教養課程）
- 平成元年 「「菊の香」についての一考察—ロレンス文学の序章」（「東洋大学工学部教養課程研究報告」第24号、東洋大学工学部教養課程）
- 平成 2年 「D・H・ロレンス；“Jimmy and the Desperate Woman”について」（「東洋大学工学部教養課程研究報告」第25号、東洋大学工学部教養課程）
- 平成 3年 「D・H・ロレンスの“Fanny and Annie”に関する一考察」（「東

- 洋大学工学部教養課程研究報告」第26号、東洋大学工学部教養課程)
- 平成 4年 「“The Blue Moccasins”に関する一考察」(「始祖鳥」第5号、立教大学D・H・ロレンス研究会)
- 平成 8年 「古代中国の服飾の色—陰陽五行説における色彩感」(共著)(「始祖鳥」第6号、立教大学D・H・ロレンス研究会)
- 平成 8年 「D・Hロレンスの“The Blind Man”についての一考察」(東洋大学工学部教養課程研究報告)第31号、東洋大学工学部教養課程)
- 平成10年 「“New Eve and Old Adam”についての一研究」(「東洋大学工学部教養課程研究報告」第33号、東洋大学工学部教養課程)
- 平成11年 「1912年のD・H・ロレンス—“Once—!”を巡って」(「東洋大学工学部教養課程研究報告」第34号、東洋大学工学部教養課程)
- 平成12年 「クロイドンのD・H・ロレンス」(「東洋大学工学部教養課程研究報告」第35号、東洋大学工学部教養課程)
- 平成18年 「1922年のD・H・ロレンス—主人公の成長を巡って—」(「dialogos No.6 東洋大学文学部紀要、英語コミュニケーション学科編」、東洋大学文学部英語コミュニケーション学科)
- 平成19年 「D・H・ロレンス—1908年～1925年」(「dialogos No.7 東洋大学文学部紀要、英語コミュニケーション学科編」、東洋大学文学部英語コミュニケーション学科)
- 平成22年 「D・H・ロレンス—生涯と作品 (1)」(「dialogos No.10 東洋大学文学部紀要、英語コミュニケーション学科編」、東洋大学文学部英語コミュニケーション学科)
- 平成23年 「D・H・ロレンス—生涯と作品 (2)」(「dialogos No.11 東洋大学文学部紀要、英語コミュニケーション学科編」、東洋大学

文学部英語コミュニケーション学科)

[書評]

- 平成 6年 *A.Fernihough, D.H.Lawrence; Aesthetics and Ideology* (「D・H・ロレンス研究」第4号、日本ロレンス協会)
- 平成27年 『ロレンスへの旅』(「英文學研究」第92巻、日本英文学会)

[学会発表、シンポジウム]

- 昭和46年 「‘dark self’が語るもの—暗黒の自我について」(日本ロレンス協会第2回大会)
- 昭和61年 「*Twilight in Italy* が語るもの」(日本ロレンス協会第17回大会)

[テキスト]

- 昭和55年 『ロレンス・アンソロジー』(共註)(弓書房)
- 昭和63年 『愛について』(共註)(文化書房博文社)
- 平成 4年 『青い靴ほか』(共註)(太陽社)
- 平成19年 *PROMINENCE English Reading* (共編著)(東京書籍)

平成28年度

英語コミュニケーション学科
活 動 報 告

学科活動報告

平成28年度 学科講演会

- ① 12月16日 利根川恵子氏 「英語教育とグローバル人材の育成」
(さいたま市教育委員会学校教育部指導 1 課)

平成28年度 海外留学・東洋大学語学セミナー参加者

1. 海外留学

1) プログラム別

留学形態	
交換留学	9
認定留学	(1年間) 1

2) 国別

アメリカ	7
オーストラリア	2
ブルガリア	1

2. 東洋大学語学セミナー

ポートランド州立大学	8
トンプソンリバーズ大学	3
ダブリンシティ大学	1
ウォーリック大学	1
サン＝ティエンヌ大学	1

3. 東洋大学協定校語学留学

ダブリンシティ大学	11
ポートランド州立大学	2
ヨークセントジョン大学	1

平成28年度 英語検定試験単位認定者

検定試験種類	計
TOEIC (600～699)	17
(700～799)	14
(800～899)	9
(900～)	2
TOEFL (493～527)	2

平成28年度 学生の活動記録

萩野公介選手（4年）

リオ・オリンピック競泳男子

400m個人メドレー 金メダル

200m個人メドレー 銀メダル

4×200mフリー・リレー（第一泳者）銅メダル

平成28年度

英語コミュニケーション学会報告

東洋大学英語コミュニケーション学会設立の趣旨

2009年は英語コミュニケーション学科創設10周年目の年であった。英コミ学会設立の構想は10周年記念行事開催の計画と並行して練られていた。六期生まで卒業生を送り出した我が学科には、卒業生と我々を結び付けるものが何もなかった。我々も学生を卒業させてそれでおしまいということになれば余りにも寂しい。時折、卒業生が研究室に訪ねて来るが、話を伺ってみると、英語から離れられず勉強を続けている者が殊の外多いことに気付く。語学学校に通う者、海外留学で夢を追う者、資格試験に挑戦する者、あるいは職を辞してまで英語圏に渡る者もいた。

大学を卒業してもなお英語への勉強意欲旺盛な卒業生がいる。それは新鮮な発見であった。その発見はやがて卒業生と在籍学生を結び付けるものが必要なのではないかという考えに発展していった。こうして英コミ学会の構想は徐々に固まっていった。言ってみれば、英語を接着剤として互いを結び付け、互いに高め合うコミュニティを作るとというのが英コミ学会の役割である。もちろん、学会であるから研究発表の場でもある。これには大学院生が中心として活動することになるだろう。また、幸い我が学科には教職に就いている卒業生が多い。現場で教員として英語教育を日々実践している卒業生と英語教育に関して、じかに貴重な意見交換ができる場としても活用されるだろう。学部生は、研究発表会や講演会を通じて、自主的に研究調査する手掛かりを先輩から知る機会を得るだろう。英コミ学会を自己研鑽のコミュニティとして互いに切磋琢磨しながら、大いに活用していきたいものである。

本来勉強や研究は自分でするものであるが、一人でやるには限界がある。しかし互いに高め合いながらやれば、そこには相乗効果が生まれ、大きな成果が期待できるものである。このささやかな活動の場が、大きく広がっていくことを期待する。我が学科は次の10年に向けて“Embark upon a new journey.”という標語を作った。その一つとして英コミ学会が、今、小さな旅に出た。

東洋大学英語コミュニケーション学会会則

- 第一条 本会は、東洋大学英語コミュニケーション学会 (Society of English Communication at Toyo University) と称する。
- 第二条 本会の事務局は、東洋大学文学部英語コミュニケーション学科研究室内に置く。
- 第三条 本会は、英語コミュニケーション論、英語圏文化・文学、グローバル教育、英語教育、英語学等の研究とその啓発を図ることを目的とする。
- 第四条 本会は、東洋大学文学部英語コミュニケーション学科の在学生、卒業生、大学院生、大学院修了生、専任教員、退職教員及び本会の趣旨に賛同する者によって構成される。
- 第五条 本会は、以下の事業を行う。
- 一、学会誌の発行
 - 二、総会、研究発表会、講演会の開催
 - 三、その他、本会の目的を達するために必要な事業
- 第六条 本会は、以下の役員を置き、任期は1年とするが、再任を妨げない。
- 会 長 一名
 - 副会長 一名
 - 委 員 若干名
- 第七条 本会の運営経費は、会費及びその他の収入による。年会費は、賛助会員及び専任教員は5,000円、大学院生は2,000円、学部生は1,000円、卒業生及び大学院修了生は2,000円とし、会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。
- 第八条 総会は、年1回以上開催し、会務を報告し、審議する。
- 第九条 本会則は、総会における決議参加者数の3分の2以上の同意によらなければ改正できない。
- 附 則 本会則は、平成22年3月13日より施行する。

■学会窓口

東洋大学文学部英語コミュニケーション学科共同研究室

(白山校舎 6 号館 4 階)

電 話：03-3945-8425

E-mail：eicom_off64@yahoo.co.jp

学科掲示板：http://6702.teacup.com/eicom/bbs

■2016年度役員

・ 会 長	倉 田 雅 美 (本学教授)
・ 副会長	佐 藤 節 也 (本学教授)
・ 委 員 総務	高 橋 雄 範 (本学教授)
会計	鈴 木 雅 光 (本学教授)
機関誌・会報	倉 田 雅 美 (本学教授)
大会・研究会	竹野谷 みゆき (本学教授)
HP担当	迦部留チャールズ(本学准教授)
卒業生担当	鈴 木 雅 光 (本学教授)
会計監査	倉 田 雅 美 (本学教授)

東洋大学英語コミュニケーション学会 第8回大会プログラム

第8回大会を次の通り開催いたします。会員以外の方もお問い合わせの上、ご参加下さい。

日時：平成28年7月30日（土）

場所：東洋大学白山校舎 6号館 4階 6410教室

懇親会会場：6号館 4階 英語コミュニケーション学科共同研究室
（参加費不要）

受付開始（6号館6410教室前）（13時30分）

開 会 式（14時00分）

司 会 学 科 長 高橋雄範教授

開会の辞 会 長 倉田雅美教授

研究発表

司 会 岩澤大和（東洋大学大学院生）

1 宋ルル（東洋大学大学院博士後期課程1年）（14時10分）

Politeness on Compliments between Chinese and English

2 小橋歩実（東京都中学校講師）（14時40分）

中学校の英語教育の実情

3 バイラ・ビレンドラ（東洋大学文学部助教）（15時10分）

A Study of Teachers' Education in Nepal for Quality Education

〈休 憩〉

総 会（15時50分）

司 会 学 科 長 高橋雄範教授

1 事業報告 鈴木雅光教授

2 その他 鈴木雅光教授

閉 会 式（16時00分）

司 会 学 科 長 高橋雄範教授

閉会の辞 副 会 長 佐藤節也教授

懇 親 会 司 会 倉田雅美教授（16時10分）

東洋大学英語コミュニケーション学会第 8 回大会報告

東洋大学英語コミュニケーション学会第 8 回大会が、7 月 30 日（土）白山校舎 6 号館 4 階（6410 教室）において、開催された。

まず最初に、学科長の高橋雄範教授から挨拶があり、次に、本学会会長の倉田雅美教授から挨拶があった。

研究発表は、3 名の若手が行った。最初、東洋大学大学院博士後期課程 1 年生の宋ルル氏による“Politeness on Compliments between Chinese and English”の研究発表が行われ、Politeness の概念や Politeness 分析の多様な意見が紹介された。次に、本学卒業生の小橋歩実氏による「中学の英語教育の実情」が発表された。中学校の英語教育がどのように行われているかの興味深い内容が、具体例とともに報告された。最後に、東洋大学文学部助教のバイラ・ビレンドラ氏による“A Study of Teachers’ Education in Nepal for Quality Education”の研究発表が行われ、ネパールにおける教育実情が詳細な分析とともに報告された。またネパールでは教師の訓練が“quality education”の重要なファクターになるとの指摘もあった。

いずれの発表も日頃の研究成果を表す密度の濃いものであり、例年にも増して、参加者から活発な意見が出て、質疑応答に火花が散った。

休憩後、総会が開催され、鈴木雅光教授により事業報告が行われた。次に、平成 27 年 7 月から平成 28 年 6 月までの会計報告が、会計監査委員の倉田雅美教授より行われ、承認された。「英コミ学会通信 No. 7」も配布された。

総会では、本学会会員が研究者を目指す場合は、本学会を活用して、全国規模の学会へと一層の活躍の場を広げてほしいとの報告があった。

閉会の辞が、本学会副会長の佐藤節也教授より行われた。引き続き 16 時 10 分より懇親会が、6 号館 4 階の英語コミュニケーション学科共同研究室で開催された。教員、大学院生、学部生、卒業生等 12 名が参加し、和気藹々と行われた。

本学会は、2010年に第1回大会を開催してから、本年度で8回目となった。大学院生を中心に、徐々に質の高い研究発表が行われるようになっているのは嬉しいことである。

第9回大会は、2017年7月下旬を予定しています。決定次第、学科のネット掲示板等にてご連絡いたします。

大学院活動報告

4月5日（火） 16時00分～17時00分 白山校舎 8303教室

大学院生ガイダンス（出席者：大学院生 8 名、専任教員 5 名）

担任教員と科目内容・概要、指導体制と学位論文、学位論文にかかわる諸規定、学年歴、その他

5月25日（水） 15時00分～17時00分 白山校舎 8301教室

大学院・英語コミュニケーション専攻第一回研究発表会

博士前期課程 2 名、博士後期課程 1 名による、研究発表会が開催された。教員 4 名、院生 8 名が参加した。質疑応答では活発な議論があった。

7月30日（土） 14時00分～17時00分 白山校舎 6410教室

東洋大学英語コミュニケーション学会第 8 回大会・総会が開催された。

本専攻から、修了生 1 名、博士後期課程の 1 名が研究発表を行った。

10月26日（水） 15時00分～17時00分 白山校舎 8301教室

大学院・英語コミュニケーション専攻第二回研究発表会

博士前期課程 4 名による、研究発表会が開催された。教員 5 名、院生 8 名が参加した。研究内容に関して、活発な議論があった。

1月31日（火） 13時00分～15時30分 白山校舎 8206教室

修士論文口述試験

平成28年度

英語コミュニケーション学科専任教員
活 動 報 告

教授 倉田 雅美

研 究 活 動

所属学会

日本ロレンス協会（評議員）

教育活動その他

担当科目

English Reading Practice IA,B、Research Studies A,B、British Culture and Literature A,B、Seminar,

大学院：英語文学・英語文化、英語文学・英語文化研究指導、英語文化特殊研究、英語文化研究指導、英文学特論IA,B、異文化コミュニケーション

委員会等

教職課程運営委員会委員、キャリア・就職推進委員会委員、文学部改革委員会委員、時間割担当、編・転入及び転部・転科生単位認定、協定校交換留学生指導（台湾）

そ の 他

スマッシュテニス顧問、バスケットボールサークルMIKKY顧問

教授 鈴木 雅光

研 究 活 動

論 文

1. 「異文化コミュニケーションについて」 東洋大学大学院紀要 第53集

2. 「例外の処理」英語コミュニケーション学科紀要*dialogos*第17号

そ の 他

1. 「草のよう、野の花のようー回想の詩（二）」（随想）英語コミュニケーション学科紀要*dialogos*第17号

所属学会

日本英語英文学会

教育活動その他

担当科目

English Reading Practice I A/B、English Linguistics A/B、Advanced English Grammar A/B、Research Studies A/B、Seminar、英語文法演習A/B、英語文法分析研究指導、英語構造分析特殊研究、英語構造分析研究指導（大学院）

委員会等

大学院専攻長、学科長補佐、カリキュラム検討委員会委員、予算委員、各種イベント委員、単位認定委員、学科予算委員 新学科WG委員

そ の 他

1. 修士学位論文審査（主査1名）
2. 少林寺拳法部部長
3. 附属姫路高校 文学部紹介（平成28年6月27日）
4. 附属牛久高校 文学部紹介（平成29年3月7日）

教授 高橋 雄範

研 究 活 動

所属学会

日本英語学会、日本文体論学会（理事）、法と言語学会

教育活動その他

担当科目

Listening Comprehension Practice A/B, Newspaper English A/B, English Reading Practice II A/B

大学院：語用論演習、語用論研究指導、語用論特殊研究

委員会等

学科長、文学部教員資格審査委員会委員、大学院専攻委員、大学院奨学生選考委員

教授 竹野谷 みゆき

研 究 活 動

論 文

Intersemiotic Issues of Translation Theory: Transformations of Participation Frameworks of the Toastmasters Club Activities. 東洋大学文学部紀要 第70集 英語コミュニケーション学科篇 *dialogos* 第17号, 55-80.

口頭発表

「言語文化研究の生態学的アプローチ：パブリック・スピーキング活動の分析」第31回日本学術振興会海外派遣者懇談会・第11回在米大学教員交流会合同開催第3回、日本学術振興会サンフランシスコセンター
2016年1月30日

所属学会

国際語用論学会、日本語用論学会、日本社会言語科学会

教育活動その他

担当科目

言語論 A,B、言語と社会 A,B、リサーチ・スタディーズ A,B、Seminar、Writing IA,B大学院：テキスト理論、テキスト理論研究指導（博士前期）、テキスト理論特殊研究、テキスト理論研究指導（博士後期）

委員会等

留学支援のための英語特別教育科目（SCAT）運営委員会委員（全学）、自己点検・自己評価委員会委員（学部）、外国語委員会委員（学部）、外国語委員会英語部門コーディネーター（学部）、紀要（*dialogos*）編集・発行委員（学科）、「学習の手引き」編集・発行委員（学科）、各種単位認定委員会委員（学科）、国際文化コミュニケーション学科「学びの手引き」編集・発行担当（学科）

研 究 活 動

論 文

- 1 . Hagiwara, Y., Horiuchi, S., Doi, A., Miyoshi, M., Edwards, P. G. “A Search for Submillimeter H₂O Masers in Active Galaxies: The Detection of 321 GHz H₂O Maser Emission in NGC 4945”, 2016, the Astrophysical Journal, 827, 69-74
- 2 . Hagiwara, Y. “Extragalactic Astronomical Masers II - Submillimeter maser and maser in narrow-line Seyfert 1 galaxies”, *dialogos*, Proceedings of the Department of English Communication, Faculty of Letters, Toyo University (東洋大学文学部紀要 第70集 英語コミュニケーション学科篇), 17, 105-114
- 3 . 萩原喜昭 “Submillimeter Continuum Emission of Active Galactic Nuclei”, 2017, 東洋大学紀要自然科学篇, 61
- 4 . Hada, K., Kino, M., Doi, A., Nagai, H., Honma, M., Akiyama, K., Tazaki, F., Lico, R., Giroletti, M., Giovannini, G., Orienti, M., Hagiwara, Y. “High-sensitivity 86 GHz (3.5 mm) VLBI Observations of M87: Deep Imaging of the Jet Base at a Resolution of 10 Schwarzschild Radii”, 2016, the Astrophysical Journal, 817,131-147
- 5 . Yun, Y., Hagiwara, Y., and 52 coauthors. “SiO Masers around WX Psc Mapped with the KVN and VERA Array (KaVA)”, 2016, the Astrophysical Journal, 822, 3-11

所属学会

日本天文学会、European Astronomical Society (欧州天文学会)、VLBI懇談会

そ の 他

口頭講演

海 外

“Recent VLBI Activities in East Asia” VLBI Seminar, Max-Planck Institute for Radioastronomy (MPIfR) informal talk, Bonn, August 25 2016

国 内

“43GHz帯VERA両偏波化の現状” 2016年VLBI懇談会シンポジウム, 山口大学 2016年12月27日

教育活動その他

担当科目

天文学 A,B, 自然科学概論 A,B, 天文学実習講義 A,B, 自然科学演習 A,B
委員会等

自然科学委員会委員、グローバル化推進委員会委員、文学部ホームページ担当委員、各種単位認定委員会委員、文学部図書館図書選書担当、国際文化コミュニケーション学科「学びの手引き」編集担当

そ の 他

日本天文学会天文月報編集委員、宇宙理学委員会班員、VLBI懇談会幹事

講師 Rosa Suen

研 究 活 動

論 文

“Collaborative stop motion project for academic writing”、東洋大学文学部紀要 第70集 英語コミュニケーション学科篇 *dialogos* 第17号, 15-34.

所属学会

JALT、JALT Framework and Language Portfolio Special Interest Group

教育活動その他

担当科目

Oral Communication IIAA・AB、Oral Communication IIBA・BB、Speech Communication A,B、通訳練習 A,B、言語習得論 A,B

そ の 他

ESSサークル顧問、“学びLIVE2016”模擬授業担当、Eicomi Station 編集

講師 Joanne May Sato

研 究 活 動

論 文

“Reflections on a Metaphorical Complexity Lens Approach to Researching in the Second Language Classroom”, 東洋大学文学部紀要 第70集 英語コミュニケーション学科篇 *dialogs* 第17号, 35-54.

所属学会

JALT (Japan Association of Language Teaching)

JALT ERSIG (Extensive Reading Special Interest Group) Coordinator

ERWC4 (The Fourth Extensive Reading World Congress) Committee Member

教育活動その他

担当科目

Global Communication I AA,AB Global Communication IIAA, AB
Interpretation Practice A,B Speech Communication A, B Academic Writing
A,B

そ の 他

“学びLIVE2016”模擬授業担当

助教 バイラ ビレンドラ プラサド

研 究 活 動

論 文

“Language Death~ Case of Newari Language” 東洋大学文学部紀要 第70集 英語コミュニケーション学科篇 *dialogs* 第17号, 81-90.

そ の 他

口頭発表

1. “A Study of Educational Policy and Practices for Linguistic Diversity Society in Nepal,” 日本比較教育学会第52回大会、2016年6月26日
2. “A study of teachers’ education in Nepal for quality education,” 東洋大学

英語コミュニケーション学会第8回大会、2016年7月30日

3. 「国境を越えた生活がもたらした途上国における変化―バネパ市を事例として」東洋大学アジア文化研究所第11回年次集会、2017 年1月21 日

所属学会

日本比較教育学会、国際異文化学会、東洋大学英語コミュニケーション学会、東洋大学アジア文化研究所

教育活動その他

担当科目

Intercultural Communication IA,B Intercultural Communication IIA,B
Computer Assisted Language Learning A,B

委員会など

各単位認定委員

教授 佐藤 節也

研 究 活 動

基調講演

“A Whale in Uncharted Waters”

Central Banking 主催国際コンファレンス (National Asset-Liability Management Asia confrence) における基調講演 (於シンガポール)

2016年7月13日

所属学会

東洋大学英語コミュニケーション学会、日本金融学会

教育活動その他

担当科目

Oral Communication IIA,B、Negotiation Skills and Theory A,B、Debate A,B、
Broadcast English A,B、Sociolinguistics A,B、Seminar

委員会等

国際学部設置推進委員会委員、各種単位認定委員会委員

准教授 Charles Cabell, P h D

研 究 活 動

所属学会

JALT、AAS

教育活動その他

担当科目

Oral Communication IA,B、Research Studies A,B、Japanese and American Cultural Studies A,B、Seminar

スピーチコミュニケーションA,B、英語コミュニケーション特殊研究、英語コミュニケーション研究指導（大学院）

委員会等

各種単位認定委員会委員、ゼミ分け担当

執筆者紹介（掲載順）

高 橋 雄 範……………東洋大学文学部教授

鈴 木 雅 光……………東洋大学文学部教授

Rosa Suen ……………東洋大学文学部講師

Joanne May Sato ……………東洋大学文学部講師

Miyuki Takenoya……………東洋大学文学部教授

Birendra Bhaila……………東洋大学文学部助教

Yoshiaki Hagiwara ……………東洋大学文学部准教授

投稿規定

◎執筆資格

- 1 本学科の専任教員による単著であること。
- 2 本学科の専任教員との共著者である非常勤講師であること。
・編集委員会で掲載の可否を決定する。

◎執筆様式

- 1 ワープロ書き完全原稿とする（MS明朝もしくはTimes New Roman 10.5pt）。
- 2 枚数はA4で15枚前後、20枚を越えない分量とする。
- 3 和文原稿の場合には、提出時に英文タイトルを添えること。
- 4 入稿は紙ベース及びデータベース（USB、FD等）によること。
- 5 以下の期日を厳守のこと。
・「執筆届」提出 6月末日
・原稿締め切り 10月15日

◎東洋大学学術情報リポジトリ登録（追加）について

原則として刊行後、リポジトリで公開するものとする。ただし、登録（追加）を否とする執筆者は「執筆届」にその旨を明記のこと。

《編集後記》

学科の改組に伴い、英語コミュニケーション学科紀要 *dialogos* は、本号をもって終刊となる。これまで本紀要を支えてくださった全ての方々に、衷心より感謝申し上げます。

紀要の終刊には一抹の寂しさが伴うが、一方で、今年度は喜びと興奮に満ちた一年でもあった。外国語としての英語教授法の専門家で、談話分析、コーパス言語学、複雑性理論などを中心に研究活動を行っておられるサトウ・ジョアン (Joanne Sato) 先生をお迎えできたことは慶びにたえない。サトウ先生には、初年度から多大なご貢献を賜り、この場をお借りして深謝申し上げたい。

そして、本学科4年生の萩野公介君が、リオ五輪・競泳男子400メートル個人メドレーで金メダルに輝いたことも、本学の歴史に永遠に残る慶事である。骨折を乗り越えての快挙であった。

「『日本で二番目に高い山は？』と聞かれても、答えられる人は少ない。どんなことでも一番を目指すべきです。全力で立ち向かい、頂点を目指す意欲が大事です」とは、北海道日本ハム・ファイターズ監督の栗山英樹氏の言葉である。

時代は変化の連続であるが、私たちも、それぞれの使命の道で、それぞれの立場で、「一番高い山」の頂上を目指し粘り強く挑んでいきたい。(T. T.)

dialogos

第 17 号

発行日	平成29(2017)年3月15日
発行所	東洋大学文学部英語コミュニケーション学科
住 所	〒112-8606 文京区白山5-28-20
電 話	03-3945-8425
発行人	高橋 雄範

東洋大学文学部紀要 第70集
英語コミュニケーション学科篇